

13. 待合室における保護者の思考様式について
第2報：年齢別の母親の関心とその関連
要因について

○下飛田道子、浜野良彦、椿山園美、
高田貴、石井洋子、桑原貞好、山口昭一

オクト・ピド・グループ 福岡市

私達の診療室では、母子分離をし治療を行なっている。母子分離を行なう理由として、子供の注意を術者に集中させることにより治療をスムーズに行なうこと、また、上手に治療ができない子供の場合、母親に必要以上の心配をかけないようにするため等が上げられる。しかし、その反面、本当は上手に治療できている子供の母親が「上手にできていないのではないか」と心配してしまうことも起こりえる。

そこで私達は第11回日本小児歯科学会九州地方会において、子供が治療中、待合室で待っている母親が何を考え、どんな事を心配しているのかについてのアンケート調査を行い、新患群と定診群に分けて比較検討した結果を報告した。

母親の心理状況を左右する項目のひとつに“年齢”が上げられる。前回の報告では、1歳から11歳までの全資料を対象として分析を行なった。今回は、1歳から6歳までを調査対象とし、1～3歳までのグループと4～6歳までのグループに分け、比較検討を行なった。

方法は、前回行なったアンケート調査結果から対象年齢群を抽出し、それぞれの項目についての比較検討を行なった。また、母親の関心（心理的要因）がどのような項目に深い関わりがあるかどうかについて統計処理を行ない、いくつかの興味ある知見を得たので報告する。

14. 乳歯列反対咬合の改善前後における歯列の三次元変化について

○丸亀知美・藤崎みずほ
早崎治明・山崎要一
渡辺里香・中田稔

九大・歯・小児歯

当科における咬合異常症例の中で反対咬合は32.5%と最も多く、乳歯列期の反対咬合はそのうちの60%を占めている。乳歯列期の反対咬合の形態的なる特徴に関する報告はあるものの、異なる装置による被蓋改善前後の経年異なる資料を用いてその作用の違いについて検索した報告は少ない。

そこで今回、乳歯列期に治療を開始し被蓋を改善した症例において、被蓋改善前後の治療の効果をより詳細に評価するため、従来より行われていた二次元的な計測とともに、三次元的な形態の変化について計測を行った。

本研究に用いた資料は、当科外来を受診したHellmanの歯年齢IIA期で乳歯に交叉咬合のない反対咬合症例のうち、治療開始前および被蓋改善後の歯列石膏模型である。歯列弓長、歯列弓幅、Overbite、Overjetについて計測するとともに、エヌ・ケー・エクス社製三次元曲面形状計測装置（VOXELAN）を用いて口蓋容積および上顎口蓋側歯頸線と上顎両側第二乳歯最遠心端間を結んだ線によってまれた部分を咬合平面に投影した面積（投影面積）を計測し、以下の結果を得た。

口蓋容積、口蓋の投影面積ともに、その変化の様相は、上顎前方牽引装置とその他の装置の大きく2つに分けられた。口蓋容積は、上顎前方牽引装置で被蓋改善を行った症例では、80%以上が減少しており、その他の装置で被蓋改善を行った症例は、70%以上が増加していた。投影面積では、上顎前方牽引装置で被蓋改善を行った症例は、80%以上が減少しており、その他の装置で被蓋改善を行ったすべての症例で増加していた。このような結果は舌容積とも関連し、治療の予後に影響するものと思われた。